

47-  
OK

奥田重俊教授最終講義

# 地域植生誌と植生図

(付 奥田重俊著作目録)

横浜国立大学附属図書館



11099155

2001.3

奥田重俊先生退官記念会

## 目 次

1. 地域植生誌と植生図 .....	1
2. 私の植生学研究のあゆみ .....	8
付. 奥田重俊著作目録 .....	15

# 1. 地域植生誌と植生図

## はじめに

本文は、平成13年2月19日に、横浜国立大学教育文化ホールで行われた最終講義における講義の要旨をもとに、当日発表した図表等を追加してまとめたものである。講義のテーマとした「地域植生誌と植生図」は、私の永い間の研究の大部分を占め、最も良く表現しているものと思い決定した。また、内容については、専門以外の出席者を考慮し、調査方法からデータのとり方、結果のまとめ方、および、研究成果の活用などにも言及した。

さらに、当日の講義でも少し触れたが、私の研究の歩みとして、出身大学である千葉大学から自然教育園を経て横浜国立大学に至る研究生生活を振り返り、そのあらましを述べた。

## 1. 地域植生誌作成と植生図

地域植生誌とは、地域に存在する全ての植生を対象として群落を具体的に決定し、それらの相互関係を明らかにしたモノグラフである。

一方の植生図は、植生配分を図示したものであり、植生と立地環境との関係を明らかにするために作成される。地域植生誌の作成と植生図化はほとんど同時に行われるが、それらの作成のための基礎資料は、大部分野外調査によって求められる。

地域単位の自然誌（ナチュラル・ヒストリー）が各地でまとめられているが、植生誌はその一環として、植物相研究などと並行して作成される。

## 2. 地域植生誌の内容と特徴

地域植生誌の主要部分は植物群落の目録である。その内容は植物社会学的立場から調査された群落の記載であり、群落の相観写真や断面模式図などによって解説される。さらに、植生調査のデータのすべてを用いて秩序だてた群落組成表が添付されている。

地域植生の研究における植生図化は、対象となる植生によって種類が異なるが、おもに現存植生図が描かれる。しかし、調査対象となった場所が都市域の場合は現存する植生が少なく、しかも群落の立地する地形そのものの改変が行われているため、同時に潜在自然植生図の作成が意義がある。これらの植生図は、群落の存在に関する面的な情報であると同時に、群落データとの比較により群落の立地の診断など相乗効果が期待できる。

地域植生誌の特徴、または期待される成果としては

- 1) 地方、県市町村などの行政単位で行う場合は、地域性が浮き出る。
- 2) 植生図を作成することにより、緑の戸籍簿とか、財産目録とかに読み換えることができる。
- 3) 時系列によるモニタリングで、緑の質・量の変遷を知る上で貴重な資料となる。
- 4) 緑地（あるいはビオトープとしての生態的な緑地）の復元・保育・創出のための基礎資料となり、都市部で特に必要である。

などが挙げられる。

## 3. 研究の対象としての植生

現存する植生は自然植生と代償植生（代償群落）に分けられる。前者は人為的影響がないか、あ

るいは極軽微な影響を受けている植生である。後者は、自然植生が様々な土地利用の結果、他の群落に置き換えられた植生を意味する。両者の割合を人間居住域を含めて見ると、当然のことではあるが、都市から離れるに従い、代償植生が増し、さらに自然植生の残存度が高くなる傾向がある。このことから、調査対象地域において、どのような植生が主要な調査対象であるかが理解される。

#### 4. 野外調査の実際

植生学の研究は生きた植生を対象とする野外研究である。したがって、研究に臨む心構えとしては、徹底した現場検証主義をとり、研ぎ澄まされた勘と豊富な経験と、的確な判断力を持ち、しかも持久力が勝負となる。

地域の植生を概観するには植物社会学的植生調査がもっとも適している。これは Braun-Blanquet 法とも呼ばれる世界共通の調査法である。

地域の植生全体が対象であるため、まず、野外調査における調査コースの設定から気を配ることが肝要である。野外で演じられる自然現象を良く読み、何にでも興味を持ち、常に全体像の把握に努める。具体的には鎮守の森、雑木林、林縁、植林地、草地、果樹園、耕作地、都市内のグラウンドや空き地などに至るまで満遍なく資料をとる。また、調査員の数は単独よりも、いくつかの役割と指導体制をもつ数名のチームを組むとよい。(図1)

植生調査には植物の鑑定が必ず付きまとう。植物の知識をどう養うか、についてはだれしもが悩むところである。結局のところ現地で体で覚え、植物の生活を繰り返し良く観察することである。さらに、一部を持ち帰って図鑑等で種名を同定し、形態、分布、学名などを確認するのがよい。また、事前に、季節を変えてフロラ調査を行えば申し分ない。鋭い観察力と旺盛な知識欲が必要なのは言うまでもない。

なお、植物の学名の知識を持つことは極めて重要なことであるが、このことを認識している人は意外に少ない。のちのち後悔しないように勉強したい。

現地調査作業に必要とする器具は高度計とクリノメーター程度であり、紙と鉛筆と正確な地形図があればそれで十分である。この調査は人間が自主的に行うものであって、決して測定器具任せには出来ない作業である。調査者は、そこに種があるかないかが重要という心掛けで臨み、計測はほとんど目測で十分である。このような調査法は、一見非科学的と非難されそうであるが、植物群落には相観、季節変化など、数字では表現出来ない多くの属性を持つからである。したがって、調査地の選定や調査枠の設定、個々の植物の被度の測定など、調査の進行はすべて調査者の才能に委ねられる。対象をよく選んで、使えるデータをとるセンスを養うことである。

立地条件の調査としては、方位、傾斜、海拔高、隣接群落、土壤調査などがあるが、とくに土壤断面の調査が重要である。したがって、小型のシャベルを用意するとよい。

収集したデータはその日のうちに整理を開始する。当日の調査コースや調査地点、さらに写真撮影地などを記録する。

#### 5. 表操作による群落単位の抽出と群落の記載

表操作(テーブル操作、あるいは組成表作業)による群落単位の抽出は一定の手順に従って行う。すなわち、素表、常在度表、部分表、群落区分表、総合常在度表、群集表の順である。この一連の表操作は、出現する種の組合せをもとにデータを再配列する作業であるが、この中で、部分表がもっとも時間を要する作業である。この部分表の操作の出来不出来が研究者の能力評価につながる。

地域単位で完成された群落区分表(または群集表)は、他地域の資料との比較が必要である。ま

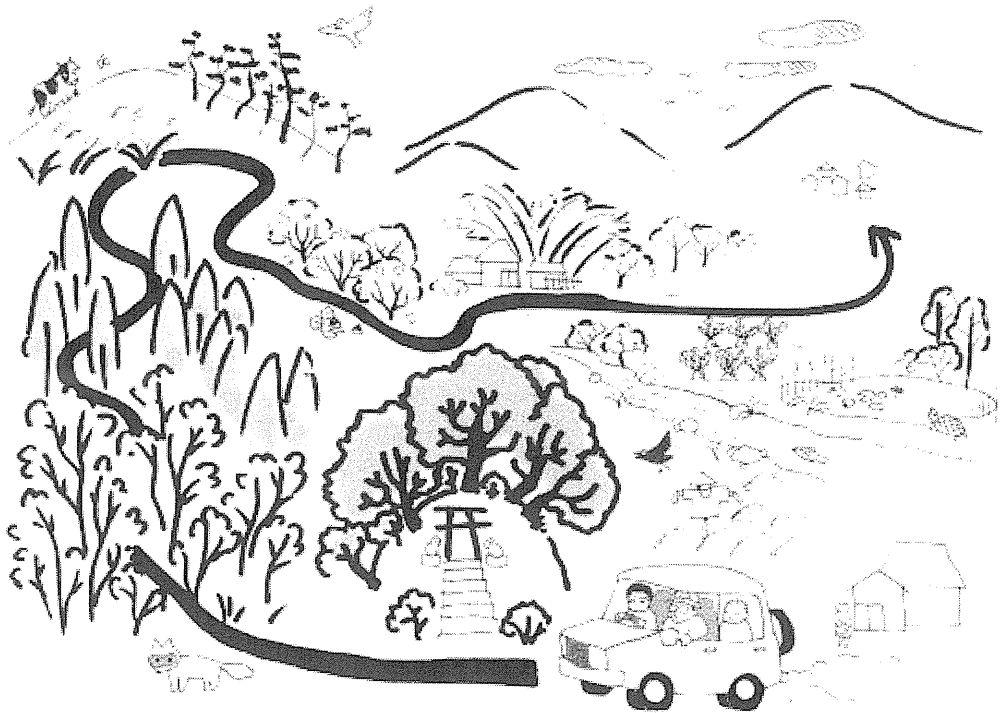


図1 調査コース（上）と調査の様子（下）（一澤麻子画）

た、それを論文に発表する場合には学名のチェックが必要である。

群落単位のエヒエラルキ一（体系上の上下関係）は、群集、群団、オーダー、クラスの4階級である。それぞれの階級は標徴種によって規定される。日本の群落単位の総数は未確定であるが、クラスは約50あり、そのほとんどは草本植生である。

群落区分が確定されると群落の記載に入る。記述する項目としては、相観、優占種、標徴種、構造、立地、遷移、分布、人為影響、保護・保全、復元などの多くの項目があり、いずれも簡潔に記述される。さらに、読者の理解を深めるため、群落配分図や群落断面模式図が作成される。とくに、群落断面模式図が重要であるが、上手に画かれた図はあまり見たことがない。

地域で存在が明らかになった群落の相互関係を、立地と時間（遷移）の軸でまとめたものが群落環という概念である。

潜在自然植生の概念はすでに一般的になっているが、なかなか理解されないのもまた事実である。現存する自然植生を手掛かりに決定するが、それらが存在しない場合には二次林、土地利用形態、耕作作物などから類推する。見えないものを見る力を養うことが是非必要である。

## 6. 植生図の作製作業

植生図化は、植生または具体的な群落の配分を地図に示して植生と立地環境との関係を明らかにするために作成される。

植生図作製作業は、あらかじめ対象地の群落分布のあらましを空中写真で把握し、そののちに現地に行く。凡例の区分は、植生調査で得られた群落区分表から導き出された単位を、植生図作成指針として整理し、それをもとに現地で白地図に描写する。

現地ではまず、地形図の判読能力が問われる。空中写真やランドサット情報は地理的位置は確実であるが、多くの植物が混生する森林の樹種や林床の状態などの詳細部分は、現場でしか識別することができない。

植生図の種類には現存植生図と潜在自然植生図がある。またスケール（縮尺）によっても情報量が大いに異なる。

植生図の印刷の段階でもっとも苦心するのは凡例の色彩の決定である。植生の種類に対する色彩は大まかには決まっているが、凡例が多くなった場合には、いたずらに色数を増やさず、記号などを組み合わせる配慮が必要である。完成された植生図を一目見たときに、凡例（群落区分）と立地条件の間に一定の傾向が読み取れるような色調にしなければならない。

## 7. 宮脇研究室による地域植生誌作成の成果

宮脇研究室による地域植生誌の作成は昭和38年（1963）以来これまで数多く行われている。その調査実施地域を示した（図2）。さらに、宮脇昭編著「日本植生誌全10巻」（1980-1989）と、宮脇・奥田編著「日本植物群落図説」（1990）についての諸元を示した（表1）。

図に示すように、これまで、研究室のスタッフ全員の努力によって実施した地域は日本全国に及び、計98か所に達している。県レベルのものは神奈川県のほか富山、長野、山梨各県などがある。対象地域の範囲はまちまちであるが、いずれの場所においても、可能な限り殆どの植物群落の単位を記録し、植生図が作成されている。

この中で、同じ地域における、モニタリングを目標とした調査を試みた地域には、藤沢市、佐倉市、多摩川河川敷などが挙げられる。それらの報告の中で、植生図に示された植生の変動の成果から、地域の立地の変遷や土地利用の変化などが読み取れる。さらに、地域の緑の復元についての基

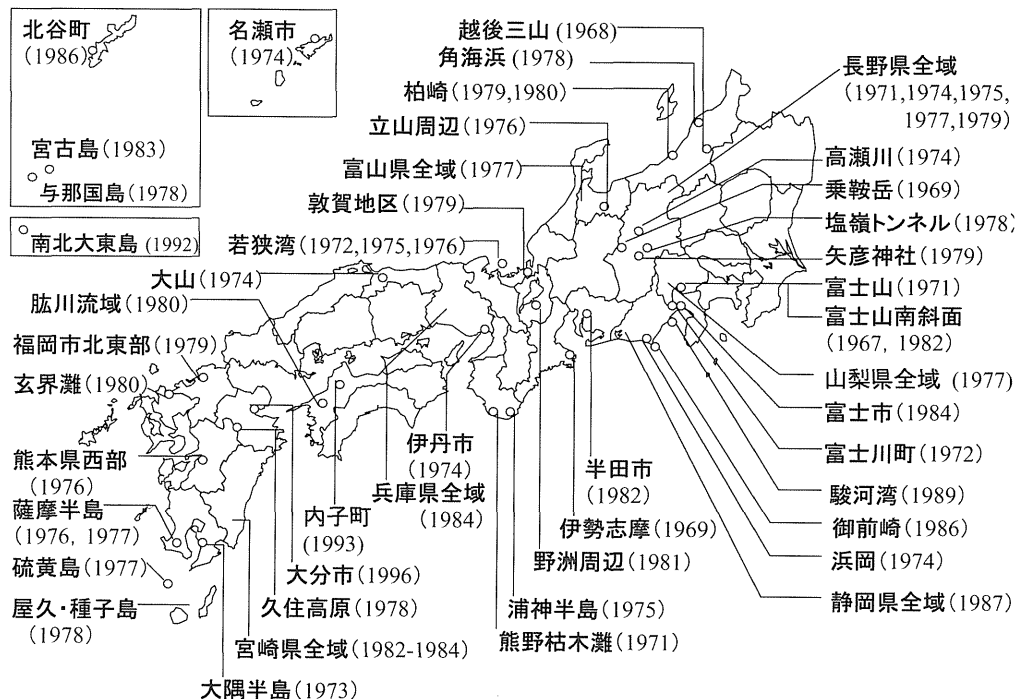
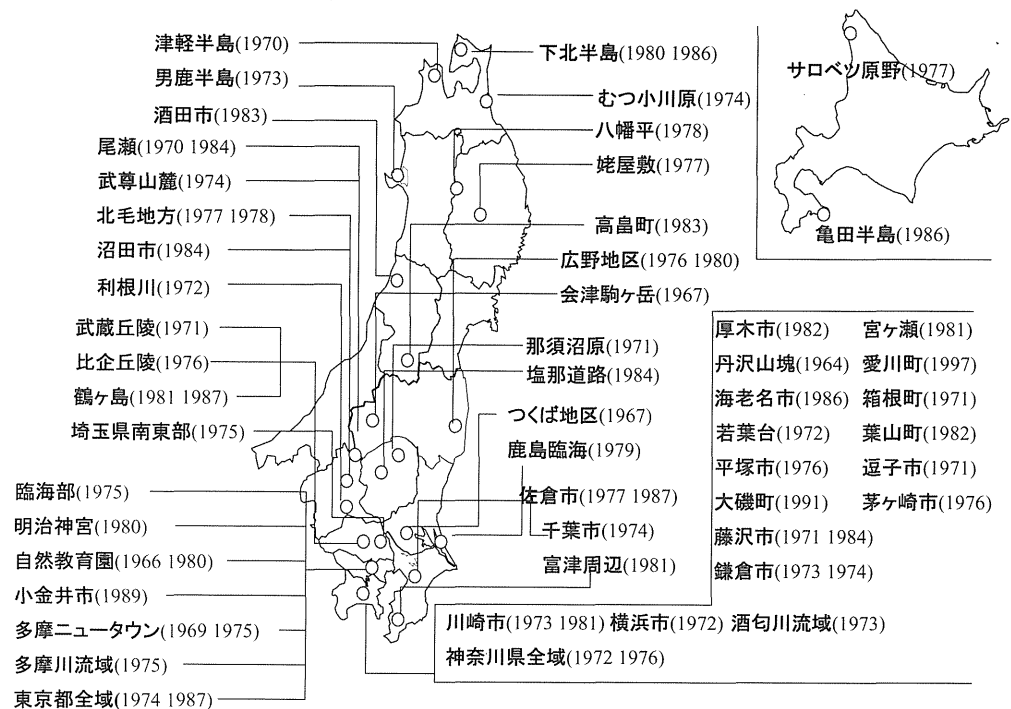
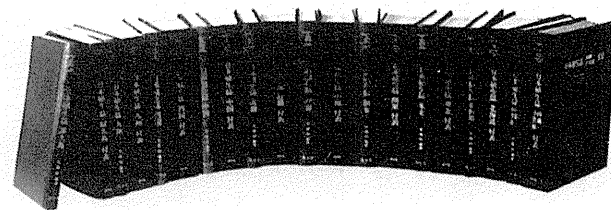


図2 宮脇研究室による植生誌作成調査実施地域 (括弧内は公表年)

表1 日本植生誌の諸元

宮脇 昭 編著  
「日本植生誌全10巻」  
(1980-89)

「日本植物群落図説」(1990)  
(株)至文堂刊



巻	発行年	総頁	群落数	地域数	口絵	表	図	植生図	執筆者数	協力者	協力機関
1 屋久島	1980	376	94	1	36	109	208	4	9	14	0
2 九州	1981	484	213	7	37	158	241	4	12	35	14
3 四国	1982	539	216	4	34	162	234	4	11	23	9
4 中国	1983	540	220	5	33	160	247	4	20	17	13
5 近畿	1984	596	249	7	35	160	260	4	22	27	8
6 中部	1985	604	292	9	37	157	245	4	27	18	7
7 関東	1986	641	273	7	49	167	265	4	28	6	6
8 東北	1987	605	224	6	35	129	251	4	27	9	16
9 北海道	1988	563	186	7	51	99	292	4	27	18	6
10 沖縄・ 小笠原	1989	676	211	3	60	135	350	4	26	23	6
計	10	5624	2178	56	407	1436	2593	40	209	190	85
									総索引	1996年	330頁
群落図説	1990	800	649	-	64	-	779	-	6	12	-
同分布図	1990	168	450	-	-	-	159	-	-	-	-



礎資料としては、殆どの地域で活用されている。

「日本植生誌全10巻」は、延べ209名の執筆者と190名、85機関の協力者等による苦節10年の成果である。総頁5,624頁に及ぶ本書には、延べ2,178の群落が1,436の表、2,593の図、407のカラー図によって記載されている。さらに、40の大型の着色植生図が掲載されており、日本列島の植生の集大成と評価されている（本業績に対し宮脇先生に朝日賞が授与された）。続いて編集された日本植物群落図説には、649の群落が記載されている。

日本植生誌の作成に際しては、それまでに公表されていた地域植生誌の成果に加え、新たに現地調査を試み、オリジナルなデータが多数加えられている。特に、四国、東北、北海道の各地方では、既存の資料に乏しかったため、数回の現地調査が行われた。

なお、本書の出版には文部省の出版助成費を戴いた。また、出版元である株式会社至文堂には一方ならぬ協力を戴いた。これらの支援がなければ本書は完成されなかったであろう。

## 8. 地域植生誌研究からわかること

地域単位で植物群落の記載を行うことは、群落そのものの生態学的研究はもとより、隣接科学から地域計画まで幅広い分野に寄与することが出来る。いくつかを挙げると

- 1) 植物群落はすぐれた環境指標である。群落を構成する個々の種については環境傾度に対する種の特性、生活型との関係が明らかになる。さらに、群落としても土地条件との対応があり、立地の質の差、土地の能力差がわかる。また、人為影響、遷移の時間差、群落の動的相関関係が明らかになる。
- 2) 同じ立地条件（とくに土地条件）に自然植生とそのさまざまな代償植生（群落）という異なる植生の存在が把握される。これらの成果により、潜在自然植生の推定が可能になる。
- 3) 得られた群落の情報から、群落または地域の多様性の判定を行うことができる。その中に、稀少植物を持つ群落があれば、群落レッドデータとして記録され、群落の保護管理の研究への足掛かりとなる。
- 4) 植生の機能を生かした環境保全への寄与がある。土砂流出防止や水資源の涵養の機能を持つ河畔林、防風林、砂防林などには地域的な植生研究の成果は十分生かされる。また、都市や産業立地における環境保全林の造成のための処方箋として貢献できる。
- 5) さらに、隣接科学の分野における応用研究への寄与が重要視される。農学や畜産学における雑草防除の課題、林学における適地適木や多様性の高い林床の管理などに貢献する。魚付保安林などのように、水産学や水理土木学などに対する貢献もある。
- 6) 地域情報から植生情報の全国的な体系化への発展の可能性については、広範囲における群落の類似性や分布限界などを比較検討する貴重な資料となる。また、定期的な調査と植生図化によるモニタリングにより、地域の緑環境の将来予測が可能になる。

## 2. 私の植生学研究の歩み

### プロローグ

私は昭和11年（1936）3月、秋田県協和町に生まれた。父、重右衛門は15代に及ぶ老舗の酒造業を営んでいたが、酒造りの合間に家庭園芸を趣味とし、裏庭に温室を所有していた。私は、幼い頃から草花をいじり、部屋にある父の園芸植物の本に読みふけた。また、母にねだって買ってもらった牧野植物図鑑は、ぼろぼろになった今でも大事に保管している。

高校は秋田高等学校で、生物部に入り、仲間とともに野外をばっしょうし、植物を採集した。秋田市の東方にある太平山（海拔1,171m）は恰好の調査地であった。植物・昆虫相に関する部員の知識は、高校生としてはかなりハイレベルのものであった。

### 1. 千葉大学文理学部

昭和34年（1959）、園芸学部を卒業し、同年4月、文理学部に再入学して植物学の基礎を学んだ。植物学研究室では、渡辺清彦、吉田治両先生に師事し、卒論ではコヒルガオ（ヒルガオ科のつる植物で不稔性である）の胚発生の研究を行った。同時に、西田誠、沼田眞両先生の薫陶を得たのも幸いであった。

在学中、研究室合同でおこなった調査実習は、日光、清澄山、銚子海岸など、きわめて有意義であった。吉田先生に同行し、大隅半島南端の佐多岬を訪れ、はじめて南方の植物に接した。単独の植物採集は関東地方を中心に、浅間山、武甲山、箱根、軽井沢、赤麻沼（現在の渡良瀬遊水池）などを訪れ、とくに、武甲山には足しげく通った。また、北海道の襟裳岬に近い、アボイ岳と芦別岳に登り、北方の植物の知識を得た。しばしば秋田に帰省して、日本海側多雪地の植物の特徴を学んだのも言うまでもない。

### 2. 自然教育園時代

自然教育園には昭和36年（1961）、沼田先生の紹介で就職することが出来た。

同園は正しくは国立科学博物館附属自然教育園と呼ぶ。東京都港区白金台にあり、面積20ha、「旧白金御料地」として史跡・天然記念物に指定されている。博物館の野外施設としての自然教育園の役割は、都市に残る貴重な自然林や湿地の保護・管理と調査研究、それらの成果を基にした野外観察指導や自然保護活動が挙げられる。さらに、生態学講座、野外実習、自然保護講座は長い歴史をもち、自然教育園が生態学教育の拠点として果たす役割はきわめて高い。

私は、これらの職務のかたわら、植物相の研究を続けた。上野の科学博物館の附属ということで、本館の分類学の先生に親しく指導を仰ぐことが出来たが、とくに奥山春季先生に師事したことがその後の植生学の研究の大きな基礎となった。奥山先生には、梓山、道方六双、奥山方広寺、瀬波、新城などに同行させて頂き、個人的な指導を受けた。野外の植物研究における個人指導の重要性をつくづく感じている。

昭和41年（1966）になって、私の研究に転機が訪れた。植生学研究と植生誌作成の開始である。当時、横浜国立大学助教授であった宮脇昭先生には、自然教育園の講習の講師として御世話になっていたが、お声がかかって植生調査に出陣することになった。最初の調査地は日本自然保護協会による調査で、会津駒ヶ岳であった。その後、越後三山、乗鞍岳、津軽半島、男鹿半島、大山と立て

続けに調査が続いた。いずれの土地も自然の豊かな場所であったため、日本の自然のすばらしさを満喫した。なお、単独行の調査であった岩手県五葉山の植生の論文の要旨（独語）を校閲いただいた、青木淳一先生（当時本館研究官）とも運命の出会いであり、永いお付き合いののち、今回、同時に退官することとなる。

### 3. 西ドイツ理論応用植物社会学研究所

昭和47年（1972）7月、宮脇先生のご推薦と自然教育園の当時の熊谷正衛園長の後押しもあって、文部省在外研究員として、あこがれの西ドイツ理論応用植物社会学研究所に留学することが出来た。わずか半年の海外生活であったが、所長のラインホルト・チュクセン先生には終始暖かく指導をして頂いた。研究所での仕事は集められた夥しい文献から、該当する群落名を抜き出してカードを作る作業で、私に与えられたのは畑地雑草群落であった。

週末には泊まり掛けで主に北西部地方の調査旅行に連れていただいたが、リュネブルガー・ハイデ、ハルツの森、ノルデナイン島、などいずれも思い出の多い土地である。

チュクセン先生からは植生の見方、調査の心構え、潜在自然植生、データの整理など色々なことを学んだが、あるとき、送られてきたばかりの論文別刷りを手に、この論文は植生を対象としながら、グラフばかりで実際の様子がさっぱりわからん、と立腹していたことを今でも思い出す。

なお、チュクセン先生の業績については、Miyawaki（1979）の紹介記事を参照されたい。

### 4. 横浜国立大学環境科学研究センター時代

#### 1) 植生学研究室

ドイツから帰国した年の9月、発足したばかりの環境科学研究センター植生学研究室に助教授で迎えられた（宮脇昭教授、藤原一繪、鈴木邦雄助手）。毎日が植生調査と表操作、植生図作成など植生誌作成作業の連続であった。私は、これまでの知識を多に活用し、教官、研究生とともに数多くの植生誌のまとめに尽力した。

宮脇研究室の最大の成果である日本植生誌については前で触れたが、10年以上に及ぶ過酷な作業を無事遂行できたのは、当時環境科学研究センターが研究に専念できた環境であったことと、多くの共同研究者による協力体制がそうさせたと感じている。

横浜国立大学へ赴任のときに、私はまだ博士号を取得していなかったが、それまで行ってきた関東地方の沖積地植生を対象に論文をまとめ、昭和52年（1977）、東北大学飯泉茂先生のご指導により、理学博士号を取得することができた。この沖積地植生の研究は現在でも続けている。また、沼田先生のご指導で、草地の群落単位と遷移との関係の研究や、東北大学酒井博先生と川鍋祐夫先生と共に牧草地雑草の研究を行うなど、植生研究に幅を持たせることが出来た。

#### 2) 海外学術調査

昭和54年（1979）、東南アジアの植生調査が開始された。最初の国はマレーシアで、ネグリセンピラン州のIBPエリアを訪れ、始めて見る熱帯林に驚嘆した。しかし、調査の本命はインドネシアでの熱帯雨林の調査であった。ボルネオ島のバリクパパンから船でリコ川を遡り、到着したソテックという小さな村が基地であった。熱帯における自然の多様性と、森林伐採の現状に接することができた。

タイ国における調査は昭和56年（1981）から開始され、マングローブ林が対象であった。この調査は一回1か月の長丁場で、来る日も来る日も海岸沿いの小村を渡り歩き、しかも早朝から日暮れまで続けられた。現地では、単なる植生調査に止まらず、マングローブに生きる現地人の炭焼きの



図3 マングローブの調査, タイ チャンタブリ, 1983.12



図4 夏緑樹林の調査, カナダ ケベック, 1988.6

状況、スズ鉱山やえび養殖などによる森林破壊にいたるまで多くの知見を得た（図3）。調査過程の後半には、タイ国北西部のインタノン、スセップ、チェンダオの3か所の山岳と、中部のサカエラートで調査を行い、雨緑林から山地の雲霧林の垂直分布などに、多くの調査資料を得た。

北アメリカにおける海外学術調査は、日本列島と北アメリカ東海岸文化景観域の比較研究がテーマで、昭和63年（1988）から3年間継続した。調査地域はアパラチャ山脈の東部地方で、フロリダ州、キイウエストからカナダ北方までの3,000kmに及ぶ一帯は、亜熱帯から亜寒帯にまたがっている。この範囲は、規模が異なるものの、地理的にはちょうど日本列島の南端から北端に対応し、よく似た植生帯を示している。この調査は1回が1か月間にわたって行われた（図4）。調査資料は膨大であったが、研究の成果は東京大学出版会の出版図書（1994、英文）にまとめることが出来た。

### 3) 国際植生学会日本大会の開催・運営

植生学者の世界的な組織として国際植生学会がある。活動の中心はドイツであるが、毎年行われる大会は隔年には遠隔地で行っている。日本では、過去昭和49年（1974、東京）、同59年（1984、東京）および平成12年（2000、長野）の3回行われた。いずれの大会においてもエクスカージョンを重視しているため、主催者においては資金面と現地の協力が課題であった。外国人研究者の講演は平均70名程度であった。私は、前2回の大会において、運営、現地案内、成果報告書（プロシーデング）の編集など多忙を極めた。

### 4) フロラ調査実習

昭和55年（1980）、母校の千葉大学園芸学部の非常勤講師としてフロラ調査の授業を担当した。また同年には、同じ教育学部において、植物社会学の授業も担当した。前者の実習は本年3月まで続いているが、後者は平成7年（1995）までで終了した。

フロラ調査実習は、野外において実際に生育する植物を観察して基礎知識を得るもので、集中講義として年3－4回行われるが、このような講義は全国の大学で唯一のものと思われる。私はこれまで、関東地方一円の適地を選び、73回実施した。授業に参加する学生数は年によりまちまちであったが、多いときには100人を越す場合もあった。参加した学生は、室内中心での授業に比べて楽しく、為になったと異口同音に感想をのべ、好評のようであった。なお、教育学部の講義においても、千葉県館山市にある実験施設を利用し、野外観察の実習を継続的に行った。

### 5) 環境庁と建設省への協力

日本列島の植生図は、環境庁自然環境基礎調査によって作成された5万分の1図が一般的である。私は、昭和50年（1975）、植生図作成当初から協力させていただいた。当時は群集の概念が未解決の状態にあり、しかも学者間の意見も異なっていて、全国的な凡例の統一に苦慮した経験がある。最近、平成12年（2000）になって、大幅な改訂作業が行われ始めている。図幅は2万5千分の1となり、以前より詳細な地図となるが、植物社会学の格段の進歩により、凡例の決定は学術的に高いものとなる。

建設省河川局による多自然型川づくり構想とその一貫である河川水辺の国勢調査が平成2年（1990）に開始され、全国109の一級河川の水系を対象に、5年の周期で生物の基礎調査が進行した。これらの調査への協力は、私が沖積地植生を専門としていたため、自然の流れであった。お蔭様で日本各地の河川の植生を視察することが出来た。

時を同じくして、近自然工法を基にしたビオトープの考えが、ドイツ、スイスなどから導入されることにより、水辺の回復の機運がにわかに活発になり、全国で自然復元の手法が試みられるようになった。生き物を生かした水辺環境の復元には、まずは現地における植生調査資料などから、植栽可能な植物を抽出することが肝要である。

表2 奥田・大野研所属大学院工学研究科修士論文表題

氏 名	学位	学位取得 年 度	論 文 表 題
浅 見 和 弘	修士	1994	急傾斜におけるコナラ林とケヤキ林の立地の比較
中 川 聡 子 (旧姓：小松)	修士	1994	多摩川の河川敷植生の多様性に関する研究
阿 部 聖 哉	博士	1995	本州中部渓流域における先駆性低木群落の組成と動態
畠 瀬 頼 子	修士	1995	本州中部，多雪地低木林の植生生態学的研究 －特にウワバミソウ・ミヤマカワラハシノキ群集について－
	博士	1998	本州中部，多雪地低木林の植生生態学的研究
一 澤 麻 子 (旧姓：山田)	修士	1995	三浦半島における海岸植生と人為的影響による群落の変化に 関する研究
	博士	1999	三浦半島における植生変遷と景観生態学的解析
尾 関 哲 史	修士	1996	丹沢山地ブナクラス域の植生 －特に立地要因と植生の分布について－
笠 原 恵 美	修士	1996	多摩川中流の河川敷における群落の配分と生育立地
井 上 嘉 信	修士	1997	鉾山跡地に成立するヘビノネゴザ群落の組成と生態
池 田 正	修士	1997	天城山におけるブナ林の組成と構造
木 村 裕美子	修士	1997	八王子市内の雑草群落の生態的特徴について
長 岡 総 子	修士	1997	本州中部におけるウラジロモミ林の組成と立地
	博士	2000	本州中部における温帯性針葉樹林の生態 －ウラジロモミ林を中心として－
三 好 織 乃 (旧姓：大池)	修士	1997	房総半島における潜在自然植生の研究 －特に常緑広葉樹林の分布について－
久 保 満佐子	修士	1998	溪畔域におけるカツラの生育立地と更新特性
下 田 彰 子	修士	1999	スギ・ヒノキ人工林に成立する林床植生の生態
寺 岡 研 悟	修士	1999	レクリエーションの場としての雑木林の利用と管理
松 間 充	修士	1999	都市河川におけるオオカナダモの生育環境と水質浄化能力
浦 上 幸 江	修士	2000	鎌倉市の植生景観に関する評価
許 琴 蘭	修士	2000	人為影響に伴う林床植生の変化 －横浜市こども自然公園を例として－
平 塚 勇 司	修士	2000	河川敷の潜在自然植生に関する研究
横 山 政 史	修士	2000	三浦半島小網代における塩生植生の生態とその生育環境
和 田 美貴代	修士	2000	上高地梓川河畔林における優占樹種の更新特性

## 6) 植生生態工学研究室と大学院教育

植生生態工学研究室（教授奥田、助教授大野啓一）が増設となったのは昭和62年（1987）である。研究内容は、従前の植生学を基礎に、生態工学の分野を癒合した、幅広い分野にわたることになった。平成5年（1993）より、大学院の教育が可能となり、計画建設学専攻の院生の授業と指導を行った。さらに、同8年（1996）には、新設の人工環境システム学専攻の担当となった。この間、指導した院生は、博士課程、修士課程あわせて25名である。院生の研究題目は別表にまとめている。

## エピローグ

思いおせば、植物相手の長いようで短い研究生活であった。仕事は難行苦行の連続であったが、終わってみれば、不十分で気に入らないことばかりである。組織の一員としてはあまり目立たず、ときに黒幕と表現されることもあったが、それは喜んで甘受している。私の性格上、むしろ番頭か、電車の車掌的なやり方が自分の能力を発揮できたものと勝手に判断している。

植生の研究は誰にでも出来る仕事ではないが、こんなに面白い研究も少ないのではなかろうか。これを機会に植生学の重要性を理解して頂き、多くの方々に関心を持って頂けたらと願っている。

これからは、これまでの未発表資料を整理して公に発表し、少しでも学会に貢献したい。同時に、社会で活躍している若手研究者の相談相手になることが出来れば幸いである。

皆様の益々のご発展を祈ります。

# 奥田重俊著作目録

(1960－2000)



## 1. 論文・報告書等

- 1) 手塚映男・奥田重俊(1963)房総半島における暖帯林植生の研究(1), 笠森寺シイ林の群落構造. 千葉大学文理学部銚子臨海研究分室研究報告, 4: 40-50. 千葉.
- 2) 手塚映男・奥田重俊(1964)丹沢山塊の植物相と植物群落-モミ林の群落構造. 丹沢・大山学術調査報告書, 125-139. 横浜.
- 3) 手塚映男・奥田重俊(1964)丹沢山塊の植物相と植物群落-草本性群落の生産構造. 同上, 166-177. 横浜.
- 4) 奥田重俊・宮脇 昭(1966)自然教育園の植生と現存植生図. 自然教育園の生物群集に関する調査報告第1集, 1-14. 東京.
- 5) 宮脇 昭・奥田重俊(1966)箕面勝尾寺の植生. 箕面勝尾寺付近の生物生態調査報告書, 3-14. 大阪企業局.
- 6) 宮脇 昭・伊藤秀三・奥田重俊(1967)会津駒ヶ岳・田代山周辺(福島県)の植生. 会津駒ヶ岳・田代山・帝釈山自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 29: 15-43.
- 7) 奥田重俊(1968)五葉山の高山性および亜高山性植生. 国立科学博物館専報, 1: 77-83.
- 8) 宮脇 昭・大場達之・奥田重俊・中山 洵・藤原一絵(1968)越後三山・奥只見周辺の植生. 越後三山・奥只見自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 34: 57-152.
- 9) 宮脇 昭・大場達之・奥田重俊(1969)乗鞍岳の植生-主として飛騨側の高山帯と亜高山帯について-. 中部山岳国立公園乗鞍岳学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 36: 50-103.
- 10) 奥田重俊(1969)越中朝日岳・雪倉岳・鉢ヶ岳の植生. 朝日岳・雪倉岳周辺における植生・動物および地質調査書, 1-28.
- 11) 宮脇 昭・奥田重俊ほか(1969)多摩ニュータウン開発地域の植生学的調査研究. 多摩ニュータウン開発地域の植生および景観管理の基礎的研究, 1-94.
- 12) 奥田重俊(1969)東京都内の残存植生1. 自然教育園報告, 1: 19-24. 東京.
- 13) 奥田重俊(1970)東京都内の残存植生2. 東京西南部の植生. 自然教育園報告, 2: 9-15. 東京.
- 14) 奥田重俊・藤原一絵・宮脇 昭(1970)津軽半島・岩木山・十二湖の植生. 津軽半島・岩木山自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 37: 1-40.
- 15) 奥田重俊・沼田 眞(1971)群落区分に基礎をおいたススキ群落の遷移と生産量の関係について. 草地生態系の生産と保護に関する研究 1970年度報告, 千葉.
- 16) 宮脇 昭・奥田重俊・井上香世子・藤原一絵・原田 洋・佐々木寧・鈴木邦雄・堀 勝・後藤伸(1971)熊野枯木灘自然公園域の植生. 熊野枯木灘自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 40: 45-82.
- 17) 奥田重俊・大野啓一(1971)西武蔵自然公園域の植生. 西武蔵自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 41: 78-102.
- 18) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵(1971)那須沼原湿原とその周辺地域の植生, 沼原湿原の現況と保存に関する生態学的考察. 日光国立公園沼原揚水発電計画に関する調査報告書, 135-182.
- 19) Okuda, S. and Numata, M. (1971) Relationships between succession of *Miscanthus sinensis* community and its productivity based on phytosociological analysis. Grassland Ecosystem Studies, JIBP Grassland Project, Progress Report 1970, 7-14. Chiba.
- 20) 宮脇 昭・藤原一絵・原田 洋・楠 直・奥田重俊(1971)逗子市の植生, 日本の常緑広葉樹

林について. 151pp. 逗子市教育委員会, 逗子市.

- 21) 宮脇 昭・藤原一絵・原田 洋・鈴木邦雄・佐々木寧・青砥航次・松浦正郎・奥田重俊 (1971) 箱根の植生と植生図. 箱根町集団施設地区計画報告書, 76-343. 横浜.
- 22) Miyawaki, A. and Okuda, S. (1972) Pflanzensoziologische Untersuchung über die Auenvegetation des Flusses Tone bei Tokyo, mit vergleichenden Betrachtung über die Vegetation des Flusses Tone. Vegetatio, 24 : 229-311. The Netherlands.
- 23) 奥田重俊 (1972) 天然記念物一笠森寺自然林. 千葉県天然記念物保存調査報告書, 19-33. 千葉.
- 24) 奥田重俊・矢野 亮 (1972) 都市環境における森林群落の推移, 都市生態系の特性に関する基礎的研究, 1-11. 千葉.
- 25) 奥田重俊 (1972) 自然教育園に生育するスダジイ巨木群の現状とその保護について, 都市林の保護に関する生態学的考察, 自然教育園報告, 3 : 1-16. 国立科学博物館附属自然教育園, 東京.
- 26) 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・井上香世子・原田 洋・鈴木邦雄・藤原一絵・大野啓一 (1973) 男鹿半島の植生. 男鹿半島自然公園学術調査報告, 日本自然保護協会調査報告, 44 : 101-143.
- 27) 奥田重俊 (1973) 多摩川流域の現況-植物相と植生. 多摩川流域自然環境保全調査報告書, 8-15. 観光自然保護財団.
- 28) 宮脇 昭・奥田重俊・原田 洋・鈴木邦雄 (1974) 群馬県武尊山麓の植生. 武尊山周辺調査結果報告書, 1-52. 群馬県.
- 29) 宮脇 昭・原田 洋・奥田重俊 (1974) 高瀬川流域の植生. 高瀬川流域自然総合調査報告書, 1-51. 高瀬川流域自然総合調査委員会. 東京.
- 30) 宮脇 昭・大野啓一・奥田重俊 (1974) 大山の植物社会学的研究. 横浜国大環境研紀要, 1 : 89-122.
- 31) 宮脇 昭・佐々木寧・奥田重俊・原田 洋・藤原一絵・鈴木邦雄・堀田一弘 (1974) 学校環境保全林形成のための植物社会学的考察. 全国158校の現地調査に基づいて 116pp. (植生図1). 横浜国大環境科学研究センター植生学研究室. 横浜.
- 32) 宮脇 昭・奥富 清・奥田重俊ほか (1974) 東京都現存植生図 (1 : 25000図7葉, 1 : 100000図1葉), 39pp. 東京都.
- 33) Okuda, S. (1975) Classification of weed communities in sown grassland. JIBP Synthesis, 13 : 51-57. Tokyo.
- 34) 宮脇 昭・奥田重俊 (1975) 若狭湾付近の植生. 若狭湾国定公園に対する原子力発電所開発に関する調査報告書, 日本自然保護協会調査報告 47 : 25-111.
- 35) 奥田重俊 (1975) 多摩川流域の植生と植生図. 多摩川流域自然環境調査報告書第1次調査, 230-300. とうきゅう環境浄化財団, 東京.
- 36) Numata, M. and Okuda, S. (1975) Relationships between succession of *Miscanthus sinensis* community and its productivity based on phytosociological analysis. JIBP Synthesis, 13 : 45-50. Tokyo.
- 37) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄 (1975) 千葉東南部・千原台地区の植生. 千葉東南部・千原台地区の植生調査報告 : 5-93 (植生図2, 付表). 日本住宅公団. 東京.
- 38) 宮脇 昭・奥田重俊・井上香世子 (1975) 埼玉県南東部の植生. 86pp. 埼玉県, 浦和.

- 39) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄 (1975) 東京湾臨海部の植生. 119pp. 運輸経済研究センター, 東京.
- 40) 奥田重俊 (1975) 森林植生の変化. 日本生態学会環境問題専門委員会編 環境と生物指標 1. 陸上編, 164-180. 共立出版, 東京.
- 41) 奥田重俊 (1975) 都市の樹木指標. 同上. 244-250. 共立出版, 東京.
- 42) 宮脇 昭・奥田重俊 (1976) 植生図作成法. 自然保護ハンドブック. 258-270. 東京大学出版会, 東京.
- 43) 宮脇 昭・奥田重俊 (1976) 首都圏の潜在自然植生. 横浜国大環境研紀要, 2: 95-114.
- 44) 宮脇 昭他 (1976) 薩摩半島南部植生調査報告書. 横浜国立大学環境科学研究センター. 90 pp. 横浜.
- 45) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・大山弘子・山田政幸 (1977) 佐倉市の植生. 120pp. 佐倉市.
- 46) 酒井 博・佐藤徳雄・奥田重俊・秋山 侃 (1976) 沖縄の人工草地における雑草の種類とその動態. 雑草研究, 21: 101-106. 日本雑草学会, 東京.
- 47) Miyawaki, A. und Okuda, S. (1977) Diagnose und Vorschläge auf Grund der Vegetationskunde für künftige Massnahmen für den Umweltschutz für die Umgebung von Tokyo. Vegetation Science and Environmental Protection (A. Miyawaki and R. Tüxen Eds.), Proceedings of the International Symposium in Tokyo on Protection of the Environment and Excursion on Vegetation Science through Japan, 361-367. Maruzen, Tokyo.
- 48) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・井上香世子 (1977) サロベツ原野の植生-湿原保護を基調とした自然利用に関する植生学的研究. 観光資源調査報告, 5: 7-47. 日本観光資源保護財団, 東京.
- 49) 奥山春季・奥田重俊 (1977) 自然公園内において採取を規制すべき植物の選定基準に関する研究. 66pp. 環境庁, 東京.
- 50) 宮脇 昭・奥田重俊・原田 洋・中村幸人 (1977) 中部圏 (東海地方) の潜在自然植生. 横浜国大環境研紀要, 3: 77-110.
- 51) 宮脇 昭・藤原一絵・鈴木邦雄・奥田重俊 (1978) 近畿圏の潜在自然植生. 横浜国大環境研紀要, 4(1): 113-148.
- 52) 宮脇 昭・中村幸人・奥田重俊 (1978) 上越地方 (渋川-水上) の潜在自然植生. 上越新幹線建設に伴う環境調査研究報告書. 171-211. 横浜国立大学環境科学研究センター植生学研究室. 横浜.
- 53) 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・箕輪隆一・弦牧久仁子 (1978) 塩嶺トンネル周辺の植生調査報告書. 岡谷・塩尻環境調査研究報告. 115-192. 東京.
- 54) 宮脇 昭・奥田重俊・原田 洋・佐々木寧・鈴木邦雄・藤原一絵 (1978) 八幡平の森林植生. 植物生態論集, 85-120. 仙台.
- 55) 奥田重俊ほか (1978) 弥彦・角田地域の植生. 角海浜地区の陸域生態系基礎調査, 80-150. 野村総合研究所.
- 56) 奥田重俊 (1978) 関東平野における河辺植生の植物社会学研究. 横浜国大環境研紀要, 4(1): 43-112. 横浜.
- 57) 奥田重俊・曾根伸典 (1978) 現存植生図の応用による多摩川流域の環境分析. 多摩川流域自然環境調査報告書第3次調査, 177-219. 東京.

- 58) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・木村雅史・箕輪隆一・弦牧久仁子・片桐正行・山崎 惇・荻原忠敬・成瀬正行 (1979) 鹿島及びその周辺域の植生. 横浜植生学会報告, 8 : 1-122.
- 59) Okuda, S. (1979) Das Lonicero-Ulmetum japonicae, eine neue Ulmenwald-Assoziation, zugleich eine vergleichende Betrachtung der japanischen Ulmengesellschaften. Bull. Yokohama Phytosoc. Soc. Japan, 16 : 203-211. Yokohama.
- 60) 酒井 博・佐藤徳雄・奥田重俊・川鍋祐夫 (1979) わが国における牧草地の雑草群落とその動態. 第1報 北海道における雑草群落区分, 同 第2報 北海道における雑草群落の動態. 雑草研究, 24 : 176-181, 182-187. 日本雑草学会, 東京.
- 61) 酒井 博・佐藤徳雄・奥田重俊・秋山 侃 (1980) わが国における牧草地の雑草群落とその動態. 第3報 秋田県・山形県における雑草群落区分, 同 第4報 秋田県・山形県における雑草群落の動態. 雑草研究, 25 : 17-23, 24-29. 日本雑草学会, 東京.
- 62) 宮脇 昭・奥田重俊・井上香世子 (1980) 明治神宮宮域林の植物社会学的研究. 明治神宮境内総合調査報告書, 269-333. 明治神宮社務所, 東京.
- 63) 宮脇 昭・奥田重俊 (1980) 塩嶺高原の草地植生の動態 (第1報) 横浜植生学会報告, 29(1) : 1-78. 横浜.
- 64) 奥田重俊 (1980) 自然教育園の植物群落-最近15年間 (1965-1980) の植生変化. 自然教育園報告, 11 : 5-27. 国立科学博物館附属自然教育園, 東京.
- 65) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・佐々木寧・木村雅史・箕輪隆一・弦牧久仁子・村上雄秀・阿久津卓・山崎 惇 (1980) 肱川上・中流域の植生. 横浜植生学会報告, 24 : 1-129.
- 66) 宮脇 昭・佐々木寧・奥田重俊・弦牧久仁子・箕輪隆一・鈴木邦雄 (1980) 玄海灘周辺域の植生. 横浜植生学会報告, 14 : 1-189.
- 67) 宮脇 昭・鈴木邦雄・藤原一絵・奥田重俊 (1980) 中国地方の潜在自然植生. 横浜国大環境研紀要, 6(1) : 77-118.
- 68) 宮脇 昭・藤原一絵・奥田重俊・箕輪隆一・弦牧久仁子・黒沢達行・小日向孝・相沢陽一・瀬沼賢一・山本敬一・望月陸夫 (1980) 柏崎周辺30km圏の植生. 横浜植生学会報告, 24 : 1-71.
- 69) 宮脇 昭・藤間熙子・奥田重俊・藤原一絵・木村雅史・箕輪隆一・弦牧久仁子・山崎 惇・村上雄秀 (1981) 川崎市および周辺の植生. 横浜植生学会報告, 24 : 1-211.
- 70) 宮脇 昭・奥田重俊 (1981) 塩嶺高原の草地植生の動態 (第2報). 横浜植生学会報告, 34 : 1-7. 横浜.
- 71) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄・佐々木寧・持田幸良・望月陸夫 (1982) 東カリマンタン, Sotek 地区の代償植生. 横浜国大環境研紀要, 8(1) : 265-293.
- 72) 奥田重俊・望月陸夫・H. ビリアデイナタ (1982) バリクパパン付近 Sotek (東カリマンタン) の植物目録. 横浜国大環境研紀要, 8 : 327-340.
- 73) 酒井 博・佐藤徳雄・奥田重俊・秋山 侃 (1982) わが国における牧草地の雑草群落とその動態. 第5報 静岡県における牧草地雑草の群落区分とその動態. 雑草研究, 27 : 251-258. 日本雑草学会, 東京.
- 74) 宮脇 昭・奥田重俊・中村幸人・鈴木伸一 (1982) 半田市の植生. 121pp. 半田市.
- 75) 奥田重俊 (1983) わが国におけるギンギン属数種のすみわけ的關係. 沼田 眞 (編) 現代生態学の断面 85-95. 東京.
- 76) 宮田 昭・奥田重俊・村上雄秀・藤原一絵・大野啓一・中村幸人・鈴木伸一 (1983) 宮古島の海岸植生. 横浜国大環境研紀要, 10(1) : 133-162.

- 77) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・中村幸人・村上雄秀・鈴木伸一 (1983) 酒田市の潜在自然植生. 132pp. 酒田市.
- 78) 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・松井 浩・鷹野秀夫・鈴木伸一・塚越優美子・益田康子 (1983) 高島町の植生. 116pp. 高島町.
- 79) 宮脇 昭・S. サンガ・A. サニット・鈴木邦雄・奥田重俊・藤原一絵 (1983) タイ国マングローブの植物社会学的研究. 横浜国大環境研紀要, 10 : 75-111.
- 80) 宮脇 昭・奥田重俊・中村幸人・鈴木伸一・村上雄秀・藤原一絵・大野啓一 (1983) 日本におけるマングローブの植生学的研究. 横浜国大環境研紀要, 10 : 113-131.
- 81) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木伸一・塚越優美子・金 聖徳・金 鍾元 (1984) 沼田市の植生. 141 pp. 沼田市.
- 82) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄・藤原一絵・中村幸人・村上雄秀・大野啓一・鈴木伸一・S. サンガ (1985) タイ国マングローブ林の植生学的研究. (宮脇 昭編) タイ国マングローブ林の植生生態学的研究, 59年度文部省海外学術調査報告書 1-100. 横浜国立大学環境科学研究センター植生研究室, 横浜.
- 83) Miyawaki, A., Okuda, S., Fujiwara, K., Suzuki, K., Ohno, K., Nakamura, Y., Suzuki, S. and Aksornkoe, S. (1985) Vegetation mapping of mangrove forest in Thailand. Studies on the Mangrove Ecosystem, 8-11. Nodai Research Institute, Tokyo.
- 84) Miyawaki, A., Fujiwara, K., Okuda, S., Suzuki, K., Ohno, K., Nakamura, Y., Murakami, Y., Suzuki, S. and Aksornkoe, S. (1985) Human impact on the mangrove forests and the potential natural vegetation of Thailand. Studies on the Mangrove Ecosystem, 12-22. Nodai Research Institute, Tokyo.
- 85) 酒井 博・佐藤徳雄・奥田重俊・秋山 侃 (1985) わが国における牧草地の雑草群落とその動態. 第6報 九州地方阿蘇・久住地域における牧草地雑草の群落区分. 雑草研究, 30 : 200-207. 日本雑草学会, 東京.
- 86) Okuda, S., Kawanabe, S. and Sakai, H. (1985) Phytosociological diagnosis of sown pastures by weed species groups. Proceeding of the XV International Grassland Congress, 572-573. Tokyo.
- 87) 宮脇 昭・奥田重俊・大野啓一・鈴木伸一 (1986) 下北半島および亀田半島南部の植生. 横浜植生学会報告, 50 : 1-157.
- 88) 奥富 清・奥田重俊・辻 誠治・星野義延 (1987) 東京都の植生 東京都植生調査報告書, 25-249. 東京都.
- 89) 奥田重俊・原田 洋 (1987) 環境保全林の形成, とくに臨海埋立地における環境保全林の初期の発達について. 森林管理のあり方とその科学的基礎, 文部省環境科学研究報告書, B309-R 12-9 : 46-53. 東京.
- 90) 宮脇 昭・奥田重俊・中村幸人 (1987) 佐倉市の植生, 10年間の植生変化について. 39pp. 佐倉市.
- 91) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・大野啓一・中村幸人・村上雄秀・鈴木伸一 (1987) 静岡県の潜在自然植生, 緑豊かな環境創造の基礎的研究. 142pp. 静岡県.
- 92) Miyawaki, A., Fujiwara, K. and Okuda, S. (1987) The status of nature and recreation of green environments in Japan. Vegetation Ecology and Creation of New Environments. (A. Miyawaki, A. Bogenrieder, S. Okuda and J. White eds.), Proceedings of the Inter-

- national Symposium in Tokyo and Phytogeographical Excursion through Central Honshu, 357–376. Tokai University Press, Tokyo.
- 93) 奥田重俊・中村幸人（1988）奄美大島における生垣の植生学的考察. 横浜国大環境研紀要, 15 : 167–174.
  - 94) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一繪・大野啓一・仲田英二（1988）西表島のマングローブ林の植生生態学的考察. 「環境科学」研究報告集, 3–30. 東京.
  - 95) 宮脇 昭・奥田重俊・中村幸人（1989）駿河湾沿岸部の植生. 横浜植生学会報告 60 : 1–127.
  - 96) 奥田重俊・中村幸人（1989）植物による環境評価基準と地域環境評価. 生命環境の保全と発展のための生態科学および生物工学に関する研究, 昭和63年度教育研究特別経費研究成果報告書, 29–41. 横浜国立大学.
  - 97) 奥田重俊・中村幸人（1989）伊豆大島波浮港における防風林について. 横浜国大環境研紀要, 16 : 107–118.
  - 98) 奥田重俊（1991）関東地方の主要河川における植生護岸の基礎. 河川美化・緑化調査研究論文集〔第1集〕45–70. 河川環境管理財団, 東京.
  - 99) 奥田重俊・大野啓一（1992）横浜市内の斜面緑地の分析・評価に係わる植生生態工学的研究. 平成2年度横浜市地域研究費による成果報告書, p.473–498. 横浜市.
  - 100) 奥田重俊（1992）河川敷内の不安定地の森林植生. 高橋剛一郎編；山地溪流における自然環境の保全のあり方―流路工における自然環境の保全, 1–9.
  - 101) 奥田重俊（1994）大庭遊水地の植物相と植生. 横浜国大環境研紀要, 20 : 127–146.
  - 102) 奥田重俊（1994）横浜国立大学常盤台キャンパスの植物. 横浜国立大学環境研紀要, 20 : 147–159.
  - 103) Okuda, S. (1994) Deciduous hardwood forest communities in eastern North America, including some conifer and shrub communities, in ; Miyawaki, A., K. Iwatsuki and M. Grandtner (Eds.) : Vegetation in Eastern North America, 155–201. University of Tokyo Press. Tokyo.
  - 104) Okuda, S. (1994) Pine forest communities in eastern North America, in ; Miyawaki, A., K. Iwatsuki and M. Grandtner (Eds.) : Vegetation in Eastern North America, 245–271. University of Tokyo Press, Tokyo.
  - 105) 奥田重俊（1994）河川や貯水ダム周辺の不安定地の植生. 応用生態工学シンポジウム, 3–29. ダム水源地環境整備センター.
  - 106) 奥田重俊（1995）水辺植生の特性と保全. 生態系保全をめざした水辺と河川の開発と設計, 50–61. 工業技術会.
  - 107) 奥田重俊（1995）二次草原における群落単位と遷移度. 沼田 眞編；現代生態学とその周辺, 298–304. 東海大学出版会.
  - 108) 内海俊策・奥田重俊・鈴木 彰・畑中恒夫（1995）千葉大学教育学部附属臨海実験所（館山市）の植物. 千葉大学教育学部研究紀要自然科学編, 43 : 5–16.
  - 109) 奥田重俊（1995）河川生態系とその回復. 田川博章編；地球環境問題解決の方法論. 平成6年度教育研究特別経費研究成果報告書 29–32.
  - 110) 浅見和弘・奥田重俊（1995）丹沢堂平崩壊地植生とその表層移動. 横浜国大環境研紀要, 21 : 233–242.
  - 111) 奥田重俊（1995）植物群落の遷移と群落の継続調査. ヨーロッパ水辺生態系の保全―欧州水

- 圏生態調査団報告, 89-97. ダム水源地環境整備センター.
- 112) 奥田重俊・小舩聡子・畠瀬頼子 (1995) 多摩川河川敷の植物群落－「多摩川河川敷現存植生図」解説書, 52pp. 付: 多摩川河川敷現存植生図 (縮尺1: 5000) 4 葉. 建設省関東地方建設局京浜工事事務所・河川環境管理財団.
  - 113) 奥田重俊 (1996) 日本の主要河川における植物群落とその配分. 平成4-6年度科学研究費補助金研究実績報告書, 「水辺環境の緑化・修復に関する植生生態工学的基礎研究 (研究代表者 奥田重俊)」1-60. 横浜国立大学環境科学研究センター植生生態工学研究室.
  - 114) 畠瀬頼子・奥田重俊 (1997) 本州中部多雪地域におけるミヤマカワラハンノキ群落の種組成について. 横浜国大環境研紀要, 23(1): 101-125.
  - 115) 井上嘉信・奥田重俊 (1998) 鉾山跡地に成立するヘビノネゴザ群落の種組成. 横浜国大環境研紀要, 24(1): 29-47.
  - 116) Okuda, S. (1998) Characteristics of floodplain vegetation in Japan. Müller, N., S. Okuda and N. Tamai (eds): Proceedings of the International Symposium on River Restoration, Tokyo, pp.25-26.
  - 117) 奥田重俊 (1998) 日本における氾濫原植生の特性. 河川の自然復元に関する国際シンポジウム論文集 pp.109-114. リバーフロント整備センター.
  - 118) 阿部聖哉・奥田重俊 (1998) 本州中部の山地河畔におけるヤシャブシ群落の分布と種組成, 植生学会誌, 15(2): 95-106.
  - 119) 山田麻子・大野啓一・奥田重俊 (1998) 三浦半島南部小網代地区周辺の植生. 生態環境研究, 5(1): 29-52.
  - 120) Müller N. and S. Okuda (1998) Invasion of alien plants in floodplains - A comparison of Europe and Japan. Starfinger, U., Edwards, K., Kowarik, I. & Williamson ed. Plant Invasions; Ecological Mechanisms and Human Responses, 321-332. Backhuys Publishers, Leiden, The Netherlands.
  - 121) 奥田重俊 (1998) 河川の自然保護. 沼田 眞編, 自然保護ハンドブック, 502-515. 朝倉書店.
  - 122) 奥田重俊 (1999) 植生と植生図. 桃木徳博・桃木芳枝編著, 地域適応型作物の導入と方法, 27-38. 三共出版.
  - 123) 畠瀬頼子・奥田重俊 (1999) 越後山脈, 守門岳における低木林の分布と地形および積雪の関係. 植生学会誌, 16(1): 39-55.
  - 124) 長岡聡子・奥田重俊 (1999) ハケ岳ウラジロモミの組成と環境要因. 横浜国立大学教育人間科学部理科教育実習施設研究報告, 12: 11-22.
  - 125) 浅見和弘・奥田重俊 (1999) 急傾斜に発達する森林群落と表層土壌の安定性について. 日本生態学会誌, 49(3): 247-257.
  - 126) 奥田重俊 (2000) [多摩川永田地区の] 植物相. 多摩川の総合研究. 河川生態学術研究会. 多摩川研究グループ. 422-431.
  - 127) 奥田重俊・笠原恵美 (2000) [多摩川永田地区の] 植生図と植物群落. 多摩川の総合研究. 河川生態学術研究会. 多摩川研究グループ. 347-361, 437-478.

## 2. 総 説

- 1) 奥田重俊 (1960) 銚子の海藻目録. 千葉生物誌 10 : 1-7. 千葉生物学会, 千葉.
- 2) 奥田重俊 (1964) 乳頭山・秋田駒が岳の植物観察記. 自然科学と博物館, 31 : 89-98.
- 3) 奥田重俊 (1965) 自然教育園の植物. 44pp. 自然教育園.
- 4) 奥田重俊 (1966) 福島県田村郡大滝根山の植物. 植物採集ニュース, 25 : 15-16, 26 : 22, 27 : 5. 植物採集ニュースの会 東京.
- 5) 奥田重俊 (1969) 津軽半島の植生概観. 自然保護, 90-91 : 10-11. 自然保護協会, 東京.
- 6) 奥田重俊 (1971) 都市にとってのみどりー生理的生態的機構. Modulator, 41 : 18-23. 大阪.
- 7) 奥田重俊 (1974) 明治神宮の森ー都市における緑地造成の成功例として. 自然保護, 149 : 4-6. 自然保護協会, 東京.
- 8) 奥田重俊 (1971) 河辺植生について. 自然科学と博物館, 38 : 216.
- 9) 奥田重俊 (1972) 朝日岳・雪倉岳付近の原生林. 植物と自然, 6 : 29-31.
- 10) 奥田重俊 (1972) 多摩川の現状ー河辺植生, 特集多摩川. アーバンクボタ, 7 : 22-23. 大阪.
- 11) 奥田重俊 (1974-1989) 日本植生図目録, 同 補遺 1~8. 横浜国大環境研紀要, 1 : 123-136 (1974), 2 : 171-176 (1976), 3 : 111-119 (1977), 5 : 161-166 (1979), 8 : 165-171 (1982), 9 : 161-164 (1983), 13 : 217-223 (1986), 15 : 175-179 (1988), 17 : 121-126 (1991). 横浜.
- 12) 奥田重俊 (1977) 河原の植物群落. 採集と飼育, 39 : 332-337. 東京.
- 13) 奥田重俊 (1980) 天然記念物の海浜植物群落. 植物と自然, 14 : 35-40. 東京.
- 14) 奥田重俊 (1981) 日本原産植物の生態的分布. 採集と飼育, 43 : 186-192. 東京.
- 15) 奥田重俊 (1982) 河原の植物 植物と自然, 16 : 2-7. 東京.
- 16) 奥田重俊 (1985) 日本の重要な植物群落とその保護. 植物と自然, 19 : 15-18.
- 17) 奥田重俊 (1990) 河原の植生の姿と保護. 私たちの自然, 342 : 7-13. 日本鳥類保護連盟, 東京.
- 18) 奥田重俊 (1990) 天然記念物の草本植物群落. 採集と飼育, 52 : 108-111. 東京.
- 19) 奥田重俊 (1991) 植物がつくる川の世界. 自然保護, 350 : 18-19. 日本自然保護協会, 東京.
- 20) 奥田重俊 (1991) 絶滅危惧種の保全と植生. 遺伝, 45(1) : 48-51.
- 21) 奥田重俊 (1991) 植物の豊かな川づくり. 河川, 541 : 22-28.
- 22) 奥田重俊 (1992) 河川生態系と植生, 川と植生Ⅰ. FRONT, 4(4) : 50-51.
- 23) 奥田重俊 (1992) 多彩な川の植物と植物群落, 川と植生Ⅱ. FRONT, 4(5) : 50-51.
- 24) 奥田重俊 (1992) 植生の保全と自然の豊かな川づくり, 川と植生Ⅲ. FRONT, 4(6) : 50-51.
- 25) 奥田重俊 (1994) 松林. プランタ, 31 : 14-18.
- 26) 奥田重俊 (1995) 春植物について. プランタ, 38 : 4-7.
- 27) 奥田重俊 (1995) 代表的な日本の湿原八カ所. 「こんにちはさくら銀行です」, 18 : 32-37. さくら銀行広報部.
- 28) 奥田重俊 (1995) 植生調査の目的と方法. 環境保全林形成のための理論と実践. 15-26, (財) 国際生態学センター.
- 29) 奥田重俊 (1995) 武蔵野の雑木林. 望星ゼミナール講演要旨, 7-11. 東海大学望星学塾.
- 30) 奥田重俊 (1995) 植物群落による環境診断. JEASセミナー講演集 (25), 7-10. 日本環境ア



セサメント協会.

- 31) 奥田重俊 (1996) 随想－野外展示. 国立科学博物館ニュース, 323 : 3. 国立科学博物館.
- 32) 奥田重俊 (1996) 植物と切手. 週刊朝日百科－植物の世界 (110号), 10 : 62－64. 朝日新聞社.
- 33) 奥田重俊 (1998) 竹林考－タケの生態と河川の関係. 特集河畔林. FRONT, 10(8) : 18－19.
- 34) 奥田重俊 (1999) 雑木林と人間. プランタ, 66 : 19－23.

### 3. 著書・分担執筆

- 1) 宮脇 昭編著 (1972) 神奈川県の実存植生 (分担執筆) 789pp. 神奈川県教育委員会, 横浜.
- 2) ドン・モウザー著, 奥田重俊監訳 (1974) 未踏の大自然, 北米スネーク川流域. 184pp. タイムライフブックス 東京.
- 3) 沼田 眞・吉沢長人編集 (1975) 新版・日本原色雑草図鑑 (分担執筆) 406pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 4) 宮脇 昭編著 (1976) 神奈川県の実存自然植生 (分担執筆). 407pp. 神奈川県教育委員会, 横浜.
- 5) 羽田健三・宮脇 昭編著 (1979) 長野県の実存植生 (分担執筆). 411pp. 長野県.
- 6) 宮脇 昭著 (1977) 富山県の実存植生 (分担執筆). 289pp. 富山県.
- 7) 宮脇 昭編著 (1977－1978). 長野県の実存自然植生図 (分担執筆). 134pp. 122pp. 長野県.
- 8) 奥山春季編 (1977) 寺崎日本植物図譜 (分担執筆). 1165pp. 平凡社, 東京.
- 9) 神奈川県県民部史編集室 (1978) 神奈川県史 各論編 (自然) (分担執筆). 1140pp. 神奈川県, 横浜.
- 10) 宮脇 昭・奥田重俊 (1978) 日本植生便覧. 850pp. 至文堂.
- 11) Miyawaki, A. and Okuda, S. (eds.) (1979) Vegetation und Landschaft Japans. Festschrift Prof. Dr. Drs. h. c. Reinhold TÜXEN. Bull. Yokohama Phytosoc. Soc. Japan 16 : 1－495. Yokohama.
- 12) 宮脇 昭編著 (1980) 日本植生誌第1巻 屋久島 (分担執筆). 376pp. 至文堂, 東京.
- 13) 宮脇 昭編著 (1981) 日本植生誌第2巻 九州 (分担執筆). 484pp. 至文堂, 東京.
- 14) 宮脇 昭編著 (1982) 日本植生誌第3巻 四国 (分担執筆). 539pp. 至文堂, 東京.
- 15) 宮脇 昭他 (1982～84) 宮崎県の実存植生. 県北地域. 25pp. 中央部地域. 38pp. 中北部地域. 38pp. (分担執筆) 宮崎県. 宮崎.
- 16) 宮脇 昭編著 (1983) 日本植生誌第4巻 中国 (分担執筆). 540pp. 至文堂, 東京.
- 17) 宮脇 昭・奥田重俊・望月陸夫編 (1983) 改訂版日本植生便覧 872pp. 至文堂, 東京.
- 18) 宮脇 昭編著 (1984) 日本植生誌第5巻 近畿 (分担執筆). 596pp. 至文堂, 東京.
- 19) 宮脇 昭編著 (1985) 日本植生誌第6巻 中部 (分担執筆). 604pp. 至文堂, 東京.
- 20) 沼田 眞他編 (1985) 現代生物学大系 生態B (分担執筆). 中山書店, 東京.
- 21) 荒木 峻・沼田 眞・和田 攻編 (1985) 環境科学辞典 (分担執筆). 1015pp. 東京化学同人, 東京.
- 22) 奥田重俊・武田良平 (1985) 人里の植物 (フィールド図鑑 植物1). 196pp. 東海大学出版会, 東京.
- 23) 奥田重俊・武田良平 (1985) 草原の植物 (同上, 2). 202pp. 東海大学出版会, 東京.

- 24) 奥田重俊・武田良平 (1985) 低地の森林植物 (同上, 3). 202pp. 東海大学出版会, 東京.
- 25) 奥田重俊・武田良平 (1985) 山地の森林植物 (同上, 4). 214pp. 東海大学出版会, 東京.
- 26) 宮脇 昭編著 (1986) 日本植生誌第7巻 関東 (分担執筆). 641pp. 至文堂, 東京.
- 27) 多摩川誌編集委員会編 (1986) 多摩川誌 (分担執筆). 1992pp. 河川環境管理財団 山海堂, 東京.
- 28) 農林水産省関東農政局利根川水系農業水利調査事務所編 (1987) 利根川水系農業水利誌 (分担執筆). 989pp. 農業土木学会, 東京.
- 29) 宮脇 昭編著 (1987) 日本植生誌第8巻 東北 (分担執筆). 605pp. 至文堂, 東京.
- 30) 奥田重俊・木原 浩 (1987) 高山植物 (フィールド図鑑 植物5). 200pp. 東海大学出版会, 東京.
- 31) 宮脇 昭編著 (1988) 日本植生誌第9巻 北海道 (分担執筆). 563pp. 至文堂, 東京.
- 32) 宮脇 昭編著 (1989) 日本植生誌第10巻 沖縄・小笠原 (分担執筆) 676pp. 至文堂, 東京.
- 33) 宮脇 昭・奥田重俊編著 (1990) 日本植物群落図説 (付日本植物群落分布図). 800pp. 至文堂, 東京.
- 34) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原陸夫 (1994) 改訂新版日本植生便覧. 910. 至文堂
- 35) 奥田重俊・佐々木寧編 (1995) 河川環境と水辺植物－植生の保全と管理 261pp. ソフトサイエンス社.
- 36) 奥田重俊編著 (1997) 日本野生植物館. 631pp. 小学館.
- 37) 日本動物学会, 日本植物学会編 (1998) 生物教育用語集 (分担執筆) 191pp. 東京大学出版会.
- 38) 玉井信行・奥田重俊・中村俊六編著 (2000) 河川生態環境評価法. 270pp. 東京大学出版会.

#### 4. 学会発表

- 1) 奥田重俊 (1966) 自然教育園の植生図. 第13回日本生態学会講演要旨, A-314. 大阪.
- 2) 宮脇 昭・奥田重俊・石坂 勝 (1967) 関東平野の河辺植生の群落学的研究 (1) 多摩川の冠水草原について. 第14回日本生態学会講演要旨, 38. 松山.
- 3) 宮脇 昭・大場達之・中山 洌・藤原一絵・奥田重俊 (1968) 越後三山・奥只見の植生. 日本生態学会第15回大会講演集, 183. 上田.
- 4) 宮脇 昭・大場達之・奥田重俊・藤原一絵 (1969) 乗鞍岳の植生と植生図. 第16回日本生態学会大会講演要旨, 39. 東京.
- 5) 宮脇 昭・奥田重俊 (1970) 関東平野の河辺植生の群落学的研究 (2). 多摩川と利根川の河辺植生単位とその配分. 第17回日本生態学会大会講演要旨集, 10. 鹿児島.
- 6) 宮脇 昭・奥田重俊 (1970) 水辺植生の群落学的考察. 同上, 11. 鹿児島.
- 7) 宮脇 昭・大野啓一・鈴木邦雄・原田 洋・佐々木寧・藤原一絵・奥田重俊・清水寛厚 (1972) 大山の植生. 第19回日本生態学会大会講演要旨, 71. 仙台.
- 8) 宮脇 昭・佐々木寧・井上香世子・原田 洋・鈴木邦雄・藤原一絵・大野啓一・奥田重俊 (1972) 男鹿半島の植生. 同上, 73.
- 9) 宮脇 昭・原田 洋・藤原一絵・佐々木寧・鈴木邦雄・奥田重俊・望月陸夫 (1972) 八幡平の植生. 同上, 74.
- 10) 宮脇 昭・藤原一絵・奥田重俊・原田 洋 (1972) 日本の常緑広葉樹林の群落体系. 同上, 84.

- 11) 宮脇 昭・奥田重俊 (1972) 首都圏の植生—とくに東京都区内について。同上, 89.
- 12) 奥田重俊・沼田 眞 (1972) 群落区分に基礎をおいたススキ群落の遷移と現存量の関係。同上, 106.
- 13) 奥田重俊・井上香世子・宮脇 昭 (1973) 若狭湾地域の植生誌。第20回日本生態学会大会講演要旨, A-20. 帯広.
- 14) 奥田重俊 (1975) 関東平野の河辺植生の群落学的研究 (3) ヤナギ林について。第22回日本生態学会大会講演要旨集, 2F05. 京都.
- 15) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵 (1976) 千葉県佐倉市の植生。第23回日本生態学会大会講演要旨, 3B27. 名古屋.
- 16) 宮脇 昭・奥田重俊・佐々木寧・大山弘子・宮田逸夫・伊藤秀三 (1977) 中国北九州の潜在自然植生Ⅲ 北九州地区。第24回日本生態学会大会講演要旨, 161. 広島.
- 17) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・鈴木邦雄・佐々木寧 (1977) ヤブツバキクラス域の潜在自然植生域の分布の考察。同上, 162.
- 18) 宮脇 昭・藤原一絵・奥田重俊・佐々木寧・鈴木邦雄・望月陸夫・大野照好・河野耕三・井上香世子 (1978) 屋久島の植生 I, ヤブツバキクラス域。第25回日本生態学会大会講演要旨集, 68. 福岡.
- 19) 宮脇 昭・佐々木寧・奥田重俊・藤原一絵・鈴木邦雄・望月陸夫・大野照好・河野耕三 (1978) 屋久島の植生Ⅱ 山地帯以高。第25回日本生態学会大会講演要旨集, 69. 福岡.
- 20) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・佐々木寧・木村雅史・箕輪隆一 (1978) 愛媛県肱川上・中流域の植生。第25回日本生態学会大会講演要旨集, 75. 福岡.
- 21) 奥田重俊・藤原一絵・鈴木邦雄・佐々木寧 (1979) 九州南部の潜在自然植生。第26回日本生態学会大会講演要旨, 84. 横浜.
- 22) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄・佐々木寧・持田幸良・望月陸夫 (1982) 東カリマンタンの植生 1. 自然植生と代償植生。第29回日本生態学会講演要旨集, 46. 大阪.
- 23) 佐々木寧・持田幸良・奥田重俊 (1982) 東カリマンタンの植生 2. 熱帯多雨林について。同上 47. 大阪.
- 24) 宮脇 昭・奥田重俊・鈴木邦雄・藤原一絵・佐々木寧・中村幸人・村上雄秀 (1982) タイ国のマングローブ林の植生学的研究 1. Chanthaburi, Ranong 地区。同上, 49. 大阪.
- 25) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・村上雄秀・中村幸人・鈴木伸一・大野啓一 (1983) 南西諸島の海岸植生。第30回日本生態学会講演要旨集, 28. 松本.
- 26) 宮脇 昭・奥田重俊・中村幸人・鈴木伸一・村上雄秀・藤原一絵・大野啓一 (1983) 南西諸島のマングローブ林。同上 33.
- 27) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・大野啓一・中村幸人・村上雄秀・鈴木伸一・鈴木邦雄 (1983) タイ国マングローブ林の植生学的研究 2. 群落体系, 同上 34.
- 28) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・大野啓一・中村幸人・村上雄秀・鈴木伸一・鈴木邦雄 (1983) タイ国マングローブ林の植生学的研究 3. 群落分布, 同上 35.
- 29) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・鈴木邦雄・大野啓一・中村幸人・村上雄秀・鈴木伸一・T. Smitinand, T. Santsuk (1983) タイ国北西部山地の森林植生 (予報) 同上 39.
- 30) Miyawaki, A., Okuda, S. and Fujiwara, K. (1984) The Status of the Nature and Creation of Green Environment in Japan. Abstracts of the International Symposium 51-52. Tokyo.

- 31) 宮脇 昭・奥田重俊・藤原一絵・鈴木邦雄・T. Smitinand, T. Santsuk (1984) タイ国中部の山地林の植生概観. 第31回日本生態学会講演要旨集 1. 東京.
- 32) Okuda, S. (1988) Veränderung der Lebensgemeinschaften in den Grünflächen des Stadtgebietes von Tokyo. Abstracts of the 3rd International Symposium on Urban Ecology, Restoration and Creation of desirable Environment for Human Life in Urban District, 22-23 Inst. Environ. Sci. Techn., Yokohama Natl. Univ.
- 33) Okuda, S. (1990) Synecological study of floodplain willow communities in Japan. Abstracts of the Plenary, Symposium Papers and Posters, presented at the V International Congress of Ecology, 383. Yokohama.
- 34) 奥田重俊・大野啓一・宮脇 昭 (1991) 北米東部の植生 3. 夏緑広葉樹林域の植生. 第38回日本生態学会大会講演要旨集 97. 奈良.
- 35) 奥田重俊 (1993) 多自然型川づくりに対する植生学的寄与. 第40回日本生態学会大会講演要旨集, 122. 松江.
- 36) Okuda, S. (1993) Conservation of the floodplain vegetation complexes in the Japanese Islands. Abstracts of the XV International Botanical Congress, Yokohama, Japan. 321.
- 37) 奥田重俊 (1994) 造成後間もない遊水地における植物群落. 第41回日本生態学会大会講演要旨集, 123. 福岡.
- 38) 奥田重俊 (1995) 河川水辺の国勢調査の成果と将来展望, シンポジウムー河川環境と植生. 第42回日本生態学会大会講演要旨集, 11. 盛岡.
- 39) 奥田重俊 (1995) わが国の河辺植物群落の体系. 第42回日本生態学会大会講演要旨集, 115. 盛岡.
- 40) 畠瀬頼子・奥田重俊 (1995) ミヤマカワラハンノキ群落の組成と構造. 第42回日本生態学会大会講演要旨集, 69. 盛岡.
- 41) 山田麻子・奥田重俊 (1995) 三浦半島の海岸植生. 第42回日本生態学会大会講演要旨集, 152. 盛岡.
- 42) 奥田重俊 (1996) 富士川の河辺植生. 植生学会第1回大会講演要旨集, 11. 岐阜.
- 43) 笠原恵美・奥田重俊 (1996) 多摩川中流域の植生図化と植生配分. 植生学会第1回大会講演要旨集, 12. 岐阜.
- 44) 畠瀬頼子・奥田重俊 (1997) 多雪山地における低木林の分布様式. 第44回日本生態学会大会講演要旨集, p.160. 札幌.
- 45) 山田麻子・原田 洋・奥田重俊 (1997) 三浦半島南部の植生と土地利用の変化. 第44回日本生態学会大会講演要旨集, p.165. 札幌.
- 46) 長岡聡子・奥田重俊 (1997) 本州中部におけるウラジロモミ林の種組成について. 植生学会第2回大会講演要旨集, p.26. 神戸.
- 47) 奥田重俊 (1998) 主な草本群落の体系. シンポジウム日本の群落体系はどこまでまとめられたか. 植生学会第3回大会講演要旨集, p.49. 横浜.
- 48) 奥田重俊 (1998) 阿武隈川支流荒川の水生林の植生ー水害防備林の一例として. 日本植生学会関東地区大会講演要旨集. 4. 横浜.
- 49) 長岡聡子・奥田重俊 (1999) 上高地におけるウラジロモミ林の組成と立地. 第46回日本生態学会大会講演要旨集, 91. 松本.
- 50) 奥田重俊 (1999) 北海道の河辺林と主な草本植生について. 植生学会第4回大会講演要旨集,

32. 旭川.

- 51) 松間 充・金子是久・奥田重俊 (1999) 都市河川におけるオオカナダモの生育状況. 植生学会第4回大会講演要旨集, 35. 旭川.
- 52) 平塚勇司・奥田重俊 (2000) エノキームクノキ林の種組成と人為による変化. 植生学会第5回大会講演要旨集, p.32. (B12). 高知.
- 53) Nagaoka, F. and Okuda, S. (2000). Species composition and habitats of Nikko fir, *Abies homolepis* forest in central Japan. Abstracts of 43<sup>rd</sup> Symposium of the IAVS. p.106 (P-50). Nagano.
- 54) 長岡総子・奥田重俊 (2000) ウラジロモミ優占林の成立要因. 第47回日本生態学会大会講演要旨集, p.101 (A208). 東広島.

## 奥田重俊教授略歴

理学博士（1977，東北大学）

昭和11年（1936）	秋田県協和町に生まれる
昭和34年（1959）	千葉大学文芸学部卒業
昭和36年（1961）	千葉大学文学部生物学科卒業
昭和36年（1961）	国立科学博物館自然教育園技官
昭和47年（1972）－48年	理論応用植物社会学研究所（西ドイツ）文部省在外研究員
昭和48年（1973）	横浜国立大学環境科学研究センター助教授
昭和62年（1987）－現在	同 教授
平成9年（1997）－11年	同 センター長
昭和55年（1980）－現在	千葉大学園芸学部非常勤講師
昭和55年（1980）－平成7年	千葉大学教育学部非常勤講師
平成12年（2000）－現在	学習院大学非常勤講師

## 学会および社会における活動（いずれも現在まで）

昭和50年（1975）	環境庁自然環境保全基礎調査委員
昭和57年（1982）	横浜市環境影響評価審査会委員
平成2年（1990）	日本生態学会自然保護専門委員
平成8年（1996）	国立科学博物館附属自然教育園運営委員会委員
平成10年（1998）	横浜市環境審議会委員
平成10年（1998）	神奈川県環境影響評価審査会委員
平成11年（1999）	植生学会運営委員

## 奥田重俊教授最終講義 地域植生誌と植生図 （付奥田重俊著作目録）

印刷 平成13年（2001）3月16日  
編集・発行 奥田重俊先生退官記念会  
横浜国立大学環境科学研究センター  
植生生態工学研究室内  
240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-7  
電話 045-339-4361（大野）  
ファックス 045-339-4375